

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 文学館の展覧会事業および教育普及事業における機能の分析：全国14県立文学館を事例に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-04-30 キーワード (Ja): 全国文学館協議会, 文学館研究, 文学館, 博物館的機能, 図書館的機能 キーワード (En): 作成者: 小国, 七慧 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000345">https://doi.org/10.57529/0002000345</a>

# 文学館の展覧会事業および 教育普及事業における機能の分析 —全国14県立文学館を事例に—

小 国 七 慧

## 論 文 要 旨

1995年の<sup>ぜんこくぶんがくかんきょうぎかい</sup>全国文学館協議会の設置以来、30年近く経過する今日に至るまで<sup>ぶんがくかんけん</sup>文学館研究<sup>きゅう</sup>上、<sup>ぶんがくかん</sup>文学館は「<sup>はくぶつかんてききのう</sup>博物館的機能」と「<sup>としょかんてききのう</sup>図書館的機能」の2つを有すると解釈されてきた。

しかしこの解釈は文学館の位置付けを曖昧にする要因ともなっている。

本論は<sup>はくぶつかんがく</sup>博物館学の立場から、文学館活動の中でも展示および教育普及に関して、全国に14館ある県立文学館への調査の結果に基づき、それらが有する機能および各機能に内包されている下位機能の整理・分析を試みた。

結果として各活動に対して、博物館学の理論に基づく文学館機能を導くとともに、それぞれの下位機能として5つの機能を新たに設定することで文学館の位置づけが従来よりも明確に提示できるようにもなる可能性を示唆した。

キーワード：<sup>ぜんこくぶんがくかんきょうぎかい</sup>全国文学館協議会 <sup>ぶんがくかんけんげゅう</sup>文学館研究 <sup>ぶんがくかん</sup>文学館 <sup>はくぶつかんてききのう</sup>博物館的機能 <sup>としょかんてききのう</sup>図書館的機能

## はじめに「博物館的機能」と「図書館的機能」の用語の問題点と課題

1995年の全国文学館協議会設置を契機に文学館を巡った研究が本格化して以来、30年近く経過する今日に至るまで、文学館は、「博物館的機能」と「図書館的機能」の2つの機能を有すると解釈されてきた。

しかし、「博物館的機能」、「図書館的機能」の用語に内包されているだろう、収集・保存、調査研究、展示、教育普及、閲覧提供などの具体的な機能が文学館の活動の中でどのように働いているのかという点に関してはいまだ体系的な整理がなされておらず、結果として、「文学館はどのような機関なのかかわからない」と言った指摘が、文学館研究者・文学研究者・文学館職員間で挙げられているほどである。<sup>1</sup>「博物館的機能」、「図書館的機能」とまとめられている文学館機能の実態はいかなるものなのか。

## 1. 文学館機能論の概要と問題提起

### 1-1. 文学館機能論の起源と経過

今日にまで続く「博物館的機能」および「図書館的機能」の概念の起源は、国内で初めて「文学館」の名称を用いて設立された機関である、日本近代文学館（1967年開館）の設立運動時に見ることができる。

1963年4月、のちの日本近代文学館の組織体となる、財団法人日本近代文学館が創設されると、同年8月および10月に池袋の西武百貨店および新宿伊勢丹において、財団主催の文学展が開催された。<sup>2</sup> その際に刊行された図録においては、共催の毎日新聞社の当時の社長・上田常隆による以下の記述が残っている。

日本近代文学館は、明治以降のわが国近代文学を対象とした、世界にも類のない専門図書館・博物館となるものであり、その設立記念事業として、まことにふさわしい大規模な催しであります。<sup>3</sup>

ここに確認できるように、日本近代文学館開館以前の設立運動時のこの時点で、同館は「専門図書館」と「博物館」の2つの性格を合わせた機関として意識されており、こうした意識が、開館以降も継承された。さらには約30年後の1995年に同館が主導する形で全国文学館協議会が設立されると文学館研究が本格化し、その中でも最初に議論の俎上に上がった文学館機能論においては日本近代文学館だけでなく、文学館全般が有する機能として「博物館的機能」と「(専門)図書館的機能」が指摘されるようになった。はじめは日本近代文学館の機能として示されていた上述の2つの機能は、全国文学館協議会設立のころから“文学館の機能”として認識されるようになったのである。

博物館学において博物館の機能は、資料の収集保存、調査研究、展示、教育普及の4つであるとされる。従ってこの理論に基づくならば、文学館の「博物館的機能」にはこの4つの機能が内包されていると仮定できる。他方、図書館情報学において図書館の機能は収集、保有、整理、閲覧提供であるとされており<sup>4</sup>、これに従えば、「図書館的機能」にはこれら4つの機能が内包されていると仮定できる。

実際にこれまでの文学館研究においては、第一に先述の全国文学館協議会初代会長の中村稔が、文学館の使命を語る中で文学館機能に関して、以下のように述べている。

文学館の本来の使命は、文学資料（中略）をひろく収集、保存、整理し、研究者などの閲覧に供することである。きわめて限られた少数の読者のための図書館的機能を果たすことが本来、文学館の役割である。（中略）

だが、今日、多くの文学館に求められているのは、文学館の収蔵品をひろく展示し、

公衆の閲覧に供する、いわば博物館的機能を果たすことである。<sup>5</sup>

中村の定義では、文学館の活動のうち、資料の収集・保存、および閲覧提供は「図書館的機能」であり、展示活動のみが「博物館的機能」を有するとされている。これに対し、当時の世田谷文学館学芸員だった生田美秋（現職・高志の国文学館学芸部長）は、「博物館的機能」を有する活動として、展示活動に加え教育普及活動も位置付けた。また図書館情報学の立場から岡野裕行は、中村同様、展示活動のみを「博物館的機能」を有するものと位置付けている。

一方で、博物館学の立場から駒見和夫は文学館を「文学系博物館」と表現した上で、「文学・文芸の作品や作者、研究者をテーマとして、関連する資料を収集・保管・研究するとともに公衆に対してそれを公開する博物館」<sup>6</sup>と定義し、文学館を博物館の一つに位置付けている。また渡邊真衣も駒見と同様の見解を示している。<sup>7</sup> 駒見・渡邊の論を用いると、収集・保管・研究・公開の全てを「博物館的機能」として位置付けることができる。

以上のように、これまでに文学館の機能としては、収集保存・調査研究・展示・教育普及・閲覧提供が指摘されている。しかしここに一つ問題点が見出される。論者によって「博物館的機能」と「図書館的機能」のそれぞれを有する活動の見解に相違が見られるのである。これは、学問上の問題だけでなく、2009年の大阪府立国際児童文学館の廃館併合問題の際には、実際の文学館の存続問題にも影響を与えた。この時に問題視されたのは廃館の事態そのものよりも（この廃館併合政策は、文学館だけでなく大阪府立博物館すべてに対する措置であり、文学館が単独で対象とされた政策ではなかった）、文学館側が、自身の果たしている機能や役割を行政側に明確に伝えられなかったという事実であり、文学館の機能や役割を館職員側も明確に認識できていないという実情を浮き彫りにされたのである。

「博物館的機能」および「図書館的機能」という用語そのものは、「博物館のような機能」、「図書館のような機能」という情報しか示しておらず（「博物館的機能」として資料の収集保存・調査研究・展示・教育普及、また「図書館的機能」として閲覧提供を内包しているだろうという推測の域にとどまる）、これらを用いていることが、文学館の機能を曖昧なものにしてしまっている要因のひとつと考えられる。

行政の都合で文学館の存亡が危ぶまれる事態は今後もいつどの館において発生するかわからない。早急に文学館機能そのものを再度根本的に整理し、文学館機能論を構築し直していくことが必至の課題である。

### 1-3. 本論について

以上の背景を踏まえ本論は、博物館学の立場から文学館活動の有する、機能の再整理を試みたい。論者は、2022年7月から2023年3月にかけて、全国に14館ある県立クラスの文学館（本項末尾の研究対象館参照）を対象に、各館の開館時から2021年度末（2022年3月）時点までの全事業実績を、各館の協力の下に調査した。収集した情報の詳細は、巻末「調査文献一覧」の通りである。本論はこれら資料からの分析に基づき各活動における文学館機能の整理・分類をしていく。

いうまでもなく、「機能」とは文学館の活動の中で働くものである。文学館の主たる活動には、資料の収集保存、調査研究、展示、教育普及、閲覧提供の5つがある。<sup>8</sup> 論本論においては手始めとしてまず、全国文学館協議会設立当初から長く「博物館的機能」を有する活動として定義されてきた展示活動および教育普及活動の2つを分析していきたい。これらをより具体化すると、展示活動には展覧会事業があり、教育普及活動には、展覧会事業時に実施される関連事業および、展覧会会期と関係なく年間の事業の中で実施される各種のセミナーや講座等の教育普及事業がある。本論はこれら3つの事業（文学館活動）を分析の対象とする。

さらに調査の中で、今回分析の対象とした各事業はそのほとんどが来館者の属性に合わせて展開されていることがわかった。この視点からの分析を加えると、博物館学上の博物館の機能に加え、その下位分類として、各機能を構成しているより具体的な下位機能にを設定できると考える。

先行研究においては先の中村の記述の中で、「きわめて限られた少数の読者」と「公衆」の二者を、一方で生田が『博物館教育論』において「文学館の教育事業は子どもを対象とした事業と一般市民を対象とした事業に大別できる」<sup>9</sup> と述べ、「子ども」と「一般市民」の二者を指摘している。なお中村論の「きわめて限られた少数の読者」とは文学研究者のことである。<sup>10</sup> 論者による調査においては三者すべてが文学館活動の対象者にされると判断されたことから、本論は研究者、一般市民（中村の指摘では「公衆」）、子どもの三者を文学館の来館者属性（対象者）とする。

前項において論者は、博物館学の理論に当てはめて文学館における「博物館的機能」にも資料の収集保存・調査研究・展示・教育普及の4つの機能が内包されているのではないかと仮定した。本論は先に分析対象として挙げた文学館の3つの事業、すなわち展覧会事業、展覧会関連事業、各種セミナーや講座等の教育普及事業が、それぞれに博物館学上の博物館の4つの機能のうち、いずれの機能を有しているのかを対象者別に整理するとともに、各機能を構築している下位機能の設定も試みたい。博物館学上の理論に当てはめた際

の文学館機能の分類と同時に、各機能の内包する具体的な機能の設定を試みるのが本論の目的である。

#### 1-4. 分析対象館（カッコ内は開館年、スラッシュはリニューアル前後を示す。）

本論の分析対象館は以下の14館である。なお石川近代文学館のみ、県立ではなく財団法人による設立・運営であるが、「県立クラス」の文学館と同等の活動実績があることから本論では分析対象に含めることとした。

- ①' 北海道文学館（1966～1995）／①北海道立文学館（1995）
- ②石川近代文学館（1968）
- ③神奈川県立神奈川近代文学館（1985）
- ④' 熊本近代文学館（1985～2015）／④くまもと文学・歴史館（2016）
- ⑤山梨県立文学館（1989）
- ⑥青森県近代文学館（1994）
- ⑦群馬県立土屋文明記念文学館（1996）
- ⑧高知県立文学館（1997）
- ⑨さいたま文学館（同上）
- ⑩かごしま近代文学館（1998）
- ⑪徳島県立文学書道館（2002）
- ⑫あきた文学資料館（2006）
- ⑬高志の国文学館（2012）
- ⑭福井県ふるさと文学館（2015）

## 2. 展覧会事業および関連事業の機能分類

### 2-1. 一般市民を対象とする事業

先の中村の指摘の中で「今日、多くの文学館に求められているのは、文学館の収蔵品をひろく展示し、公衆の閲覧に供する（以下略）」とあるように、文学館の展覧会事業には、「研究者対象」と謳ったものではなく、基本的には一般市民を対象者の中心として、研究者にも応えるものとなっている。

具体的に県立クラスの文学館で最も設立の古い石川近代文学館の事業を見ると、開館初期から展覧会、関連事業ともに実施実績があり、展覧会においては展示機能と教育普及機

能、関連事業においては教育普及機能が見出される。さらにこれらは郷土の文学者、特に徳田秋声、室生犀星、泉鏡花を中心とした主題で構成されていた。石川近代文学館に限らず県立文学館は、基本的に当該地域の出身者や、訪問歴のある文学者などを主題とした展覧会の開催を中心としており、またその関連事業として実施される各種の講演会や朗読会、座談会、読書会等の関連事業も、必然的に展覧会の主題となっている文学者の作品、すなわち郷土文学や郷土の文学者をテーマとしていることが大半である。文学館は館の展覧会を中心に講演会や講座など関連事業や教育普及活動等、各種の事業を通して郷土の文学者とその作品を紹介することで、郷土教育を目的とした教育普及機能を有しているのである。

また関連事業のみに着目すると下教育普及活動の下位機能として、郷土教育、文学教育について、レクリエーション機能を果たす事業が見られる。ここでも石川近代文学館を事例にすると、関連事業の中には、講座、講演会などの座学的なものだけでなく、同館開館初期の1969年に実施された「文学散歩 第1回加能作次郎のふるさとを訪ねて」に最初の実施を認めることのできる、「文学散歩」をはじめとする各種のレクリエーション的なイベントがそれに該当する。文学散歩とは、文学者と生前にゆかりの深かった名所や、著作物の舞台となった場所を訪ねるもので、文学者の感性を育んだ背景を体感し、作品の世界観を深めることのできる体験型のイベントである。これは、調査対象とした文学館14館のうち13館において最低1度は実施されているほど、人気の高い事業の一つであり、通常は日帰りで行われるが、石川近代文学館、北海道文学館（道立以前の時期）では宿泊を伴って遠方まで赴く日程で実施された事例もある。

この他にも、2000年代ごろから複数の文学館で実施されるようになった展覧会関連事業として、コンサートや寄席、落語鑑賞等、芸術鑑賞系の事業がある。これらは展覧会の関連事業だけでなく、単独の教育普及事業としての開催例が多い。文学館においては講座や講演会等のような知識を教授する教育的事業だけではなく、上述のような体験的なイベントによって、来館者の関心を惹きつける努力がなされている。

### 2-3. 子どもを対象とする事業

1960年代から1970年代の文学館活動（この時期の県立クラスの文学館は石川近代文学館のみ）においては、子どもを対象とした事業が実施されることはなかった。これはそもそも文学館の主題とする文学者の著作物の大半が、読者対象が大人のものであることと関係している。しかしながら、1984年に全国で2番目の県立文学館として開館した神奈川近代文学館においては、開館翌年の1985年に、「日本の子どもの文学展」の関連事業として、「会期中の土・日曜日には和室を開放して絵本が自由に読める「こども読書室」を設け」<sup>11</sup> た。

さらに1986年には、「鈴木三重吉没後50年記念展」の関連事業において、前年度同様の「こども読書室」の設置に加えて「こども映画祭」を開催したりして、一般市民向けの事業にみられる講座や講演会等とは異なる形で、子どもに対する①'文学教育機能を果たす方法を模索し始めた。なお、「日本の子どもの文学展」も、「鈴木三重吉没後50年記念展」も展覧会自体の構成は大人（研究者、一般市民）、特に児童文学研究者を想定したものである。これに対して、展覧会主題そのものも含めて子どもを対象とするものが登場するのは、1990年8月から10月にかけて熊本近代文学館（現・くまもと文学・歴史館）において開催された「少年少女文学展」が最初の事例である。この展覧会では、熊本出身の少年少女文学者やさし絵作家などの作品や資料が展示されたのだが、その開催予告として以下の記述がある。

八月が夏休み期間中ということもあり、なるべく多くの児童や少年少女に本を読む喜びや楽しさを知ってもらえるような、夢のある展示会を計画中です。<sup>12</sup>

これは、文学館において初めて本格的に子どもを文学館の来館対象者として捉えた展覧会であった。このようにして子どもに対しても、展覧会においては展示機能および教育普及機能が、教育普及活動においては教育普及機能が果たされていくようになった。

関連事業に着目すると1990年代後半ごろからは、北海道立文学館における毎年恒例の企画「ファミリー文学館」の関連事業における「絵本づくり」、「銅版印刷」、「版画教室」などの体験型のイベントに代表されるような、ワークショップが多くの文学館で実施されるようになる。これは現在に至るまで子ども向けの関連事業の定番として定着しており、子ども向けの関連事業では、下位機能としてレクリエーション機能を伴う教育普及活動が先行していた。

一方で、2000年代半ば以降は、展覧会の内容に関連して「俳句コンテスト・ジュニアの部」（神奈川近代文学館・2006）や高校生俳句バトル（熊本近代文学館・2006）、「アナウンサーと高校生による朗読会」（青森県近代文学館・2013）なども開催され、教育普及機能の下位機能である文学教育機能を伴う関連事業が見られるようになってくる。

さらに同じ時期には一部の館において子ども本人に対してだけでなく、その周辺から子どもの文学教育を支援しようとする事業も見られるようになる。代表的なものに、山梨県立文学館において2007年から開始され現在まで続いている、「教師のための学習会」が挙げられる。これは、文学館の学校教育への活用を目指したもので、「県内の小・中・高校の教師を対象に春と秋の企画展に関わって、文学館職員による説明と観覧」<sup>13</sup>が実施されている。このように、神奈川近代文学館の「映画祭」に見られたような、直接的な文学教育とは別の手段から始まった子どもを対象とした展覧会関連事業は、徐々に子どもの文学

教育をも視野に入れるようになり、近年は特に学校における国語教育に接点を持つことで日々の子どもの“学習”に直接的に働きかけ、下位機能としての市民教育機能を有する教育普及機能も果たすようになってきている。

ここで再び展覧会に関してみていくと、2000年代からは多くの館が夏の企画展として、子どもを対象とする展覧会を開催するようになり、文学館における児童文学展が本格的に増加する。群馬県立土屋文明記念文学館では、2000年に「子どものよみもの原画展」を開催して以来、夏の期間には、「みんなおいでよ 絵本のくにへ（現代少年少女・童謡詩集）」展（2001）など、子どもを読者対象とした文学作品に関する展覧会が開催している。また、2003年には、詩人のうらさわこうじ氏に協力を得て、児童詩作教室の作品を展示するという参加型の展覧会、「第1回 うらさわこうじが選ぶ児童詩展」を開催した。また神奈川近代文学館では、2006年の「佐藤さとる コロボックル物語展—だれも知らない小さな国」、山梨近代文学館においては「「赤毛のアン」の世界へ」展（2006）が開催されるなど、児童文学展は毎年夏の恒例企画として継続的に実施されている。

このように2000年代に入って以降、展覧会、関連事業ともに、児童生徒に対する文学教育機能や、市民教育機能を果たす事業が充実してきたのだが、他方で、2000年代後半以降は、特定の文学館においてレクリエーション要素の強い事業が実施されるようになっている。特に顕著なのは高知県立文学館であり、2008年の「ムーミンの世界展」、2009年の「リサとガスパール&ペネロペ展」、近年ではさらに飛躍して、ウルトラマン映画の関係資料を主題とした「空想特撮大作戦」（2020）や、「シンデレラ展」（2021）など、文学教育とは遠い主題の展覧会を展開している。他にもさいたま文学館の「マンガ聖地巡礼 in サイタマ☆」展（2008）や、北海道立文学館の「ミッフィーのたのしいお花畑」展（2016）など、サブカルチャーや幼児向けアニメーションを主題とした展覧会も開催されるようになってきている。

なおこれらの展覧会の関連事業は、例えば先の高知県立文学館の「ムーミンの世界展」における、「親子でつくろう ムーミンのポップアップカード」、「スナフキンの帽子を作ろう～わくわく花かざり～」、「空想特撮大作戦」展における、缶バッジ作りのワークショップなどのように、文学教育の要素を含まない内容となっていることが多い。近年の子どもを対象とした事業では、こうした“娯楽”に偏向したレクリエーション機能を伴う事業が急増傾向にある。

### 3. 教育普及事業の機能分類

#### 3-1. 研究者が対象となる事業

文学館の教育普及事業のうち研究者を対象とする事業は、研究者を対象とする、というよりも、事業の性質上必然的に「研究者が対象となって」、文学館を拠点として行なっている文学研究活動となっている。具体的には全国文学館協議会設立直後に中村が指摘している「宮沢賢治学会」<sup>14</sup>、「中原中也の会」など、文学館を拠点として結成された会員制の研究会が挙げられる。<sup>15</sup> これらは、文学館の会議室等を活動拠点に定期的な研究会、勉強会を開催してその活動の一部として取り込まれているもので個人文学館を中心に見られるのだが、県立クラスの文学館においても唯一、石川近代文学館の「泉鏡花研究会」（1969発足）に同様の活動を確認できる。泉鏡花は、郷土の文学者として、室生犀星、徳田秋声らとともに石川近代文学館が顕彰する文学者の一人である。同館は開館した1968年より、「文学館の会」を立ち上げ、その月例会の中で泉鏡花に関する勉強会を開催した。泉鏡花研究会は文学館友の会月例会から発展したもので、月に1回の定期的な勉強会を開催し、その成果をまとめたものとして、1974年8月には『泉鏡花研究』を刊行した。以降、勉強会活動は数回にわたる長期休会を挟みながらも現在まで継続されており、『泉鏡花研究』に関しても、不定期に刊行を重ね、最新のものでは2020年3月刊行の第14巻がある。文学館を拠点とした研究会としては、先に挙げた個人記念館の研究会を含めた中でも、最も早く設立され、最長の活動期間を持つ会である。こうした活動は、下位機能として市民研究拠点機能を有する教育普及機能を果たしているといえよう。

#### 3-2. 一般市民を対象とする事業

一般市民を対象とする教育普及事業において最も多く開催されているのは、半年、または1年間など一定の期間にわたって継続して実施される文学講座や読書会、1日限定の講演会などである。いずれも、県立クラスの文学館の中で最も開館の早い、石川近代文学館の初期の活動から存在しており、「井上靖読書会」（1968～1970）や「文章の会」（1975）、「漢文に親しむ会」（1975）などの通年の文学講座や、「中野先生（中野重治）を囲む会」（1970）、「杉森久英座談会」（1972）などの1日限定の講演会などをはじめ、様々な事業が実施されている。これらにおいては基本的には文学館の主題や顕彰文学者、さらには当該地域の文化・風土に関連するテーマが設定され、日頃の展覧会活動においては伝えきれない知識を教授・共有する機会となっている。特に県立文学館という特性から、神奈川近代文学館の文学講座「文学の風景—神奈川ゆかりの作品を味わう」（1992～1994）や、山梨県立文学

館の「年間文学講座：ゆかりの文学講座」（1990～1995）、「年間文学講座：山梨の文学講座」（1996～現在）、さいたま文学館の「埼玉文学講座」（2004年～現在）、徳島県立文学書道巻の「文学講座：徳島の文学を楽しむ」（2006年～2015年）などのように、立地地域のゆかりの文学に焦点を当てた講座が多くの文学館において積極的に実施されている。

一方で、「古典文学講座」、「近代文学講座」、「読書会」、「朗読会」、「文芸講演会」など、館所蔵資料に縛られない、文学一般を主題とした講座も数多く実施されており、地域の社会教育の場として郷土教育に限らず、文学教育全般の知識を教授する事業まで幅広い主題によって展開されている。こうした講座、講演会、その他各種のセミナー等は、教育普及機能を有するものであり、より具体的には下位機能としての文学教育機能、郷土教育機能の2つが設定できるといえよう。

さらに近年は、上述のような“教養”的な内容の事業だけではなく、より高度で実践的な内容にまで踏み込んだ事業も実施されるようになってきている。例えば、2005年より高知県立文学館において開始され、現在も続いている「近世土佐文学研究会」は、古文書読解の上級者を会員としており、同館の所蔵資料の読解指導を受け、会員自らが読解作業にあたるという、高度な活動をしている。他にも徳島県立文学書道館においては開館初年度の2002年から、現役の声優やナレーターを講師として招いて朗読の専門家を養成する、「朗読リーダー養成講座」を実施している。同館では、県出身の小説家の養成を目指して、「若い人たちのための小説家養成講座」（2015年～現在）も実施している。

また、「山梨文学賞」、「埼玉文学賞」、「とくしま文学賞」など、文学館が文学賞を主催し、受賞作品を文芸誌（「山梨の文学」、「文芸埼玉」、「文芸とくしま」）にまとめて刊行するといった事業も実施されている。くまもと文学・歴史館においては、熊本近代文学館時代の1993年より現在に至るまで、友の会の事業として、『友の会文集：湧水』を刊行している。

これらの事業は、前述の下位機能である②文学教育機能、③郷土教育機能を有する事業のように、受講者自らの知識や教養を深めるという目的よりも、より高度な文学教育の教授とその成果の社会への還元を主眼としていることから、先に指摘した文学教育機能とは異なる下位機能として設定すべきと考える。そこでこれ以降は前述の下位機能としての②文学教育機能を「②文学教育機能（教養型）」と改め、ここに例示したような高度な教育機能を果たす事業の方を、④文学教育機能（専門教育型）」とする。すなわち、文学館の教育普及事業における下位機能の文学教育機能には、さらに2系統の性格を見出すことができるのである。

こうした高度な教育機能を有する事業の展開と呼応するように、より広く、市民の文化活動や文学研究活動に目を向けた事業も近年の文学館においては展開されるようになって

きている。その一例としては高志の国文学館において2013年から開始された「高志プロジェクト」が挙げられる。同事業は、「富山県の風土や歴史、文化をより深く調査・研究し、発信することにより、郷土の文化や魅力を再認識し、次世代へ継承することを目的としたもの」で、「富山県ゆかりの文学や郷土の研究を行うグループを公募・選考し、優れた団体に奨励金を交付する」事業<sup>16</sup>である。研究対象とした14館の中でも他に類似の例を見ない、県民の文化活動・および研究活動を具体的な手段によって支援する高志の国文学館のみの独自の研究助成事業である。このような研究者の支援だけでなく、県出身の芸術家を支援する事業として、例えば高知県立文学館の「ことのはロビーコンサート」(2017～現在)に代表される、定期コンサートの実施もいくつかの文学館において認められる。これらは文学館を会場として、立地する県出身の若手音楽家を奏者として招いての演奏会を開催するもので、レクリエーション的なイベントでありつつも、それ以上に、地元の若手芸術家の活躍の機会を設けるといふ地域還元的、市民教育的な役割を果たしている。こうした事業は全国的にみてまだそれほど実施例は多くないが、地域の社会教育機関として下位機能としての市民教育機能を果たしていると位置づけられる。

他方で前項の関連事業の分析の際にも見られたように、下位機能としてのレクリエーション機能を有する教育普及事業も数多く存在し、その実施数は関連事業同様に、近年増加傾向にある。先の若手芸術家支援とは異なり、純粋な鑑賞会として開かれる各種のコンサートや、トークショー、ギターライブ等は、レクリエーション要素が多く、文学館事業には下位機能として文学教育機能や市民教育機能を有する事業と、レクリエーション機能を有する事業が並存しているのが実態である。

### 3-3. 子どもを対象とする事業

子どもを対象とする教育普及事業は、展覧会および関連事業と同様に、神奈川近代文学館が最初に取り組みを始めており、それは1987年と1988年に実施された「子ども映画祭」であった(前述の1986年実施の「子ども映画祭」は展覧会関連事業であったが、1987年以降は、単独の教育普及事業として実施されるようになっていく)。この後、同館では1992年から再び「子ども映画祭」を実施しているのだが、1989年開館の山梨県立文学館においても、「夏休み親子映画会」、「春休み親子映画会」(いずれも1990～2019)が実施されており、1990年代前半における子ども向け事業としてはどの文学館においても映画上映会が主流であった。その理由は前述した通り、文学館の収集資料が大人を読書対象とする文学者の関係資料であることにある。この時期の文学館はまだ来館者対象として子どもを捉え始めたばかりであったのである。

しかし1990年代後半になると、新設文学館の登場とともに、急速に各館で様々な事業に取り組みられるようになる。1996年開館の群馬県立土屋文明記念文学館においては開館初年度と翌1997年度に、「高校生文芸講座（詩・小説）」を実施している。これは子どもに対する文学教育関係講座の中で最も早い事業である。また、1997年開館のかごしま近代文学館では、1999年と2003年に小学5年生と6年生を対象とした「夏休みこども文学講座」を開催している。これは、講師に椋鳩十記念館職員を招いて2日間にわたって実施され、1日目は講義等の座学、2日目は文学館から徒歩で椋鳩十の旧居まで向かい、親族からの話を聞くという構成であった。<sup>17</sup> なお椋鳩十は長く鹿児島県に居住していたことから、かごしま近代文学館の顕彰文学者の一人である。

このかごしま近代文学館の「夏休みこども文学講座」のように教育普及事業においては、子どもを対象とする場合にも郷土文学や郷土文化関係の事業が多いことに注目したい。これは同じく子どもを対象とする展覧会関連事業では見られることのなかった傾向である。かごしま近代文学館以外でも、高知県立文学館において、2007年から現在まで継続して開催されている、未就学児から小学生を対象とした「おはなしキャラバン」では、「土佐民話を中心に紙芝居や絵本の読みきかせなど」<sup>18</sup> が実施されており、子どもが郷土文学に触れる貴重な機会となっている。これらにおいては下位機能としての郷土教育機能を含む教育普及機能を有しているといえよう。

2000年代に入ると、未就学児から中高生まで幅広い年齢層を視野に入れ、それぞれの年代に向けた事業が実施されるようになる。未就学児から小学生低学年ごろを対象とした事業では、北海道立文学館の「わくわく～子どもランド」（1999～現在。これは正確にはすでに1995年に開始されていた「母と子の文学のつどい」を発展させた事業である）や、さいたま文学館の「お話の泉」（2003～現在）、神奈川近代文学館の「かなぶんきっずクラブ」（2004～現在）など、絵本の読み聞かせや紙芝居・人形劇公演などがある。中高生を対象とした事業では、北海道立文学館における「夏休み～中・高生のための文学道場～中高生のための創作講座～」(2002～2007)、さいたま文学館における中学生を対象とした、「楽々読書感想文講座」（2004～2008）および「中学生国語講座」（2009～現在）、徳島県立文学書道館における「中・高生のための夏休み文芸広場」（2011）および、大学生まで対象を広げた「学生のための夏休み文芸広場」（2012～2014）、さらにあきた文学資料館の「高校生のための文学講座」（2011～2017）などの実施例がある。この他にも、「百人一首教室」や「書き初め教室」等、季節の行事と関連させた事業も数多く実施されている。これらの事業は、文学教育機能を伴う教育普及機能を有しているといえる。

また2000年代は、学校教育の場と連携した取り組みも実施された。代表的な事例として、

群馬県立土屋文明記念文学館における「児童詩作教室」(2000～2010)と「児童短歌教室」(2011～現在)がある。これらは、県内の小学校に詩人や歌人を講師として派遣し、創作指導をするという内容で、2003年からは詩作教室・短歌教室の中で創作された作品を選出し、文学館内で「児童詩展」を開催して展示紹介するとともに、優秀作品の表彰式と発表会も実施するようになった。またこの事業に関連して2013年から2016年度にかけては、教員を対象とする研修会「歌人の声を聞く～子どもと短歌～」も年に1回実施された。他にも福井県ふるさと文学館における、「出前文芸創作教室」と「オーサートーク」(両事業とも2015～現在)ではいずれも高校生を対象として、前者は現役の文学作家が高校に出張し、文芸創作の手法等に関する講義を実施するという内容、後者は「若者に人気の作家が高校を訪問」<sup>19</sup>し、自身の文芸活動に関する講演を行うという内容で実施されている。

このような「博学連携」的な取り組みはこの2館のみに留まらず、青森県近代文学館や神奈川近代文学館、山梨県立文学館、北海道立文学館等における館職員による出張講座や、小中学校、高等学校の図書館等を会場としたパネル展の実施など、様々な形によって展開されている。また文学館から講師や資料を派遣・貸出するだけでなく、かごしま近代文学館が2013年から実施している、鹿児島国際大学との共催事業などのように、小中高校生や大学生が文学館で開催される事業自体に館職員とともに参画するという取り組みもまた近年、複数の文学館において実施されている。こうした学校教育と文学館事業とを連携させた事業は下位機能として市民教育機能を伴う教育普及機能を果たしていると設定することができる。

一方で、先に指摘したように展覧会関連事業では下位機能としての文学教育機能を伴う事業よりもレクリエーション機能を有する事業が多かったが、教育普及事業においてはレクリエーション機能を有する事業はそれほど散見されない。もちろん、幼児向けの絵本の読み聞かせや朗読劇・紙芝居公演などの事業について、下位機能である文学教育機能を有する事業と位置づけるか、あるいはレクリエーション機能を有する事業と位置づけるかは、明確な線引きをすることは難しいが、少しでもその事業内容に文学教育的要素を排除できないものについては、本論においては文学教育機能を有するものとしておく。

## 終わりに 文学館の「博物館的機能」の機能分類

本論では、従来の文学館研究における「博物館的機能」および「図書館的機能」に定義されていた文学館機能の再整理を目的として、文学館事業の中でも展覧会事業および展覧会関連事業、そして教育普及事業の有する機能の分析を行った。

各項の分析から研究者、一般市民、子どもと3つの対象者全てをまとめて各事業の機能を整理すると、まず展覧会事業においては博物館学上の4つの機能のうち、展示機能および教育普及機能が、展覧会関連事業においては教育普及機能が見出された。また教育普及事業においては教育普及機能が果たされているといえる。これらに加えて、各機能の下位機能として、展覧会事業の有する機能においては文学教育機能、郷土教育機能、レクリエーション機能が、関連事業の有する教育普及機能においては、文学教育機能、郷土教育機能、レクリエーション機能、さらに市民教育機能が含まれていると設定できる（図1および図2）。また、教育普及事業の有する教育普及機能の下位機能には文学教育機能、郷土教育機能、レクリエーション機能、市民教育機能がその下位機能として設定できる（図3）。

図1 展覧会事業の有する機能

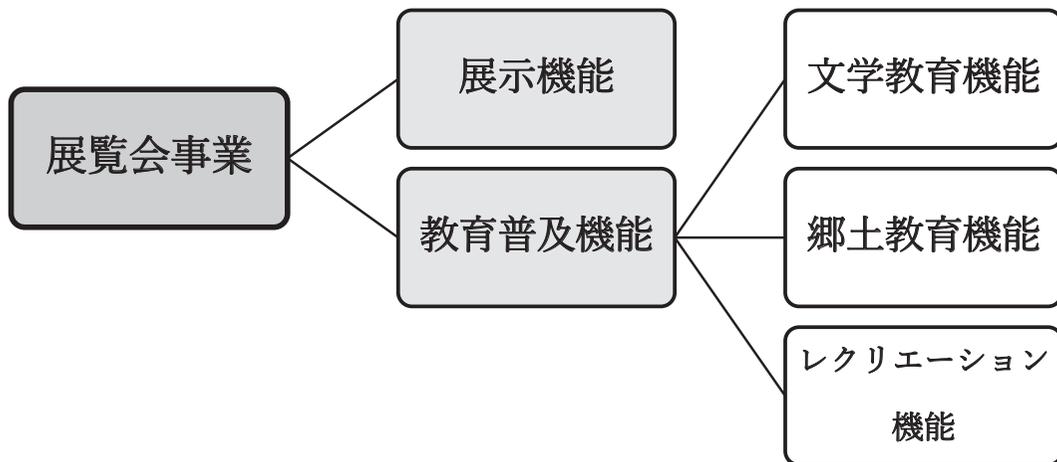


図2 展覧会関連事業の有する機能

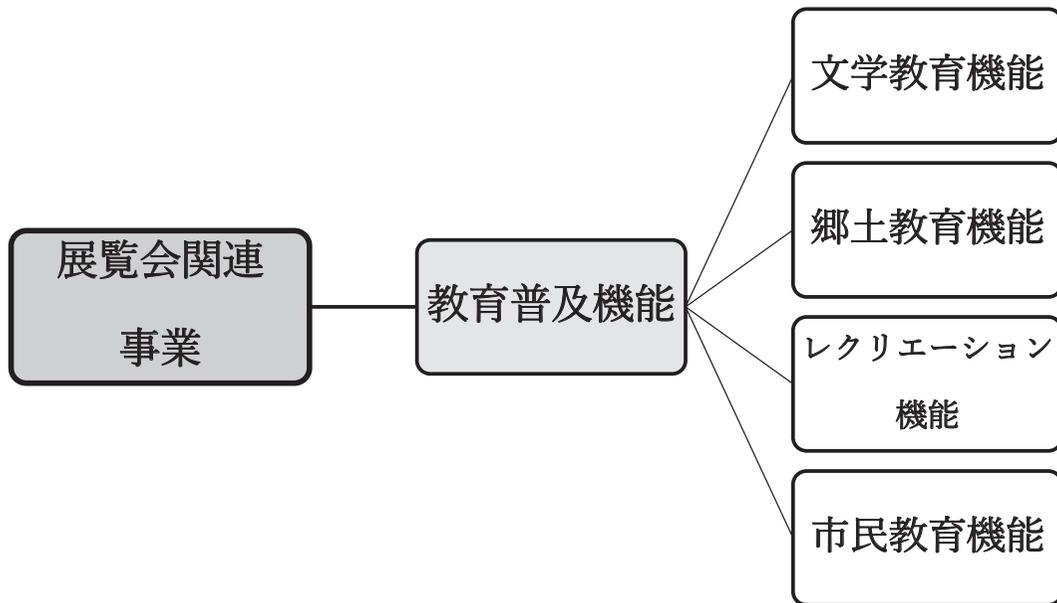
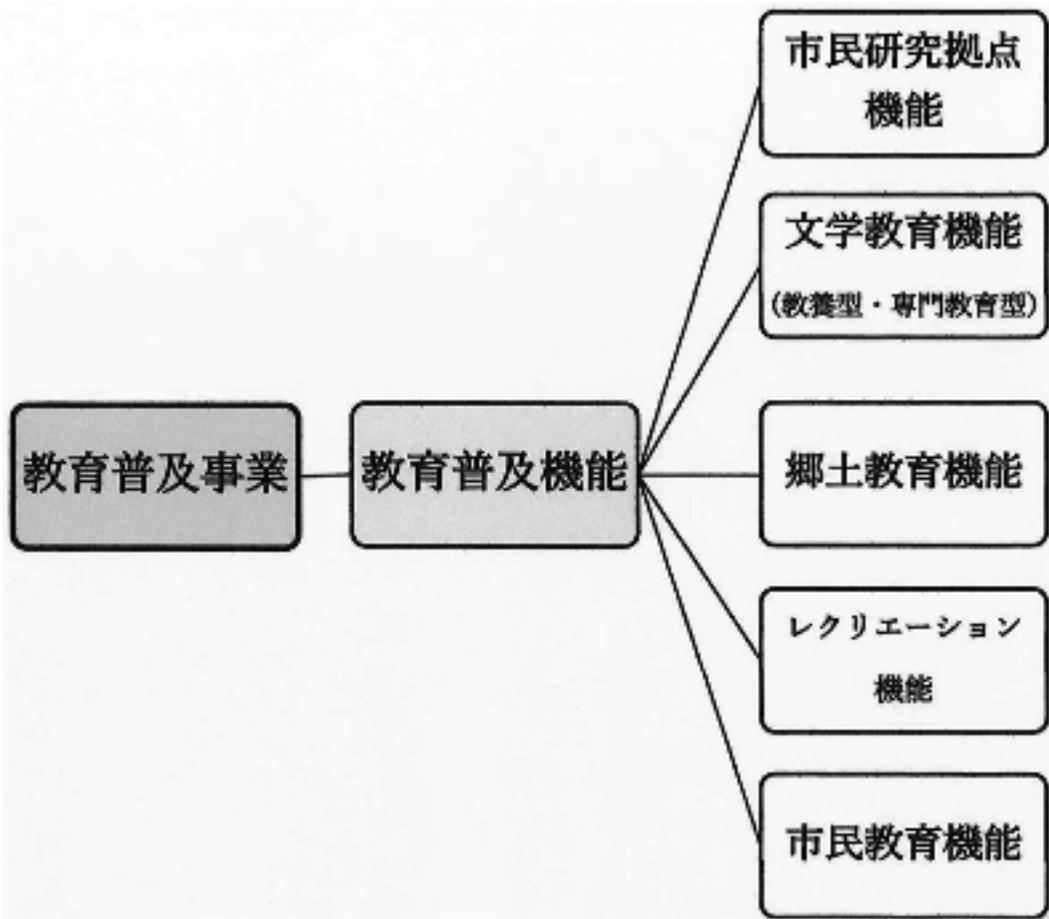


図3 教育普及事業の有する機能



本論冒頭で指摘した、大阪府立国際児童文学館廃館問題が注視されていた時期に元神奈川近代文学館館長の紀田順一郎は、文学館がどのような目的をもっているのかという点が、行政側に理解されないことを問題視すると同時に、文学館側もまた明確に提示できていないことを問題点として指摘していた。<sup>20</sup> この指摘から10年以上が経つ現在もなお、これに対する明確な解は示されていない。しかし今回本論が設定した下位機能を用いれば文学館の機能を従来よりもより詳細かつ明確に述べるができるようになるのではないかと。ただし本論は文学館活動の中でも、展示、教育普及活動のみに着目した研究であるから、残りの活動とその機能についても今後分析を行い、すべてを合わせた上での総体としての文学館機能論を導く必要があるだろう。これはこれからの研究課題としたい。

ここでさらに各下位機能について、それらを有する事業がどのように展開されているのか、改めてその実施状況を年代順にみていきたい。(表1、2、3の通り。表中の①～⑭は、

第1項末尾の研究対象機関と対応する)。

表1 年代別・下位機能別 展覧会事業の実施状況

	文学教育機能	郷土教育機能	レクリエーション機能
1960年代 新設 ①・②	①'② 2/2	①'② 2/2	0/2
1970年代	①'② 2/2	①'② 2/2	0/2
1980年代 新設 ③・④'・⑤	①'②③④'⑤ 5/5	①'②③④'⑤ 5/5	0/5
1990年代 新設 ①・⑥・ ⑦・⑧・⑨・⑩	①'①②③④'⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ 10/10	①'①②③④'⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ 10/10	0/10
2000年代 新設 ⑪・⑫	①②③④'⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫ 12/12	①②③④'⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫ 12/12	⑧⑨ ⑪ 3/12
2010年代 新設 ⑬・⑭	①②③④'⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫⑬⑭ 14/14	①②③④'④⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫⑬⑭ 14/14	③ ⑥ ⑧⑨⑩ ⑪ ⑬⑭ 7/14
2020年代	①②③④⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫⑬⑭ 14/14	①②③④⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫⑬⑭ 14/14	③ ⑥ ⑧⑨⑩ ⑪ ⑬⑭ 7/14

表2 年代別・下位機能別 展覧会関連事業の実施状況

	文学教育機能	郷土教育機能	レクリエーション機能	市民教育機能
1960年代 新設 ①・②	①'② 2/2	①'② 2/2	0/2	0/2
1970年代	①'② 2/2	①'② 2/2	0/2	0/2
1980年代 新設 ③・④・⑤	①'②③④'⑤ 5/5	①'②③④'⑤ 5/5	0/5	0/5
1990年代 新設 ①・⑥・⑦・⑧・⑨・⑩	①'①②③④'⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ 10/10	①'①②③④'⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ 10/10	①'① ③ 2/10	0/10
2000年代 新設 ⑪・⑫	①②③④'⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫⑫⑫⑫ 12/12	①②③④'⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫ 12/12	① ⑤ ⑦⑧⑨ ⑪ 7/12	⑤ ⑦ 2/12
2010年代 新設 ⑬・⑭	①②③④'④⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫⑬⑭ 14/14	①②③④'④⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫⑬⑭ 14/14	①②③④'④⑤ ⑦⑧⑨⑩ ⑪ ⑬⑭ 12/14	⑤ ⑦⑧⑩ 4/14
2020年代	①②③④⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫⑬⑭ 14/14	①②③④⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫⑬⑭ 14/14	①②③④⑤ ⑦⑧⑨⑩ ⑪ ⑬⑭ 11/14	⑤ ⑦ ⑩ 3/14

表3 年代別・下位機能別 教育普及事業の実施状況①（教育普及機能の下位機能）

	市民研究拠点機能	文学教育機能 (教養型)	文学教育機能 (専門教育型)	郷土教育機能	レクリエーション機能	市民教育機能
1960年代 新設 ①・②	② 1/2	①'② 2/2	0/2	①'② 2/2	①'② 2/2	0/2
1970年代	② 1/2	①'② 2/2	0/2	①'② 2/2	①'② 2/2	0/2
1980年代 新設 ③・④・⑤	② 1/5	①'②③④'⑤ ⑦⑧⑨⑩ 5/5	0/5	①'②③④'⑤ ⑦⑧⑨⑩ 5/5	① ④'⑤ ⑧⑨⑩ 1/5	0/5
1990年代 新設 ⑥・⑦・⑧・⑨・⑩	② 1/10	②③④'⑤ ⑦⑧⑨⑩ 9/10	④' ⑨ 2/10	①'①②③④'⑤ ⑦⑧⑨⑩ 9/10	①'①② ④'⑤ ⑧⑨⑩ 7/10	③ ⑤ ⑦ ⑨ 4/10
2000年代 新設 ⑪・⑫	② 1/12	①②③④'⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫ 12/12	④' ⑧⑨ ⑪ 4/12	①②③④'⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫ 12/12	①②③ ⑤ ⑧⑨⑩ ⑪ 8/12	①②③④'⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ 10/12
2010年代 新設 ⑬・⑭	② 1/14	①②③④'④⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫⑬⑭⑭⑭⑭ 14/14	③ ⑧⑨⑩ ⑪ ⑬ 6/14	①②③④'④⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫⑬⑭⑭⑭⑭⑭ 14/14	①②③④'④⑤ ⑩ ⑪ ⑬⑭ 9/14	①②③④'④⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫⑬⑭⑭⑭⑭⑭⑭ 14/14
2020年代	② 1/14	①②③④⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫⑬⑭⑭⑭⑭⑭⑭⑭ 14/14	④ ⑧⑨⑩ ⑪ ⑬ 6/14	①②③④⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫⑬⑭⑭⑭⑭⑭⑭⑭ 14/14	④⑤ ⑥⑦ ⑩ ⑪ ⑬⑭ 8/14	①②③④⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪⑫⑬⑭⑭⑭⑭⑭⑭⑭ 14/14

これらの表には示されていないが、すでに各項の分析の中で指摘してきた通り、調査対象とした全ての文学館に共通する傾向として、開館から年数を追うごとに年度あたりの展覧会の数だけでなく、一展覧会あたりの関連事業の増加が見られる。これは近年の博物館全体においても同様にみられる傾向であるが、文学館独特の背景も影響している。全国文学館協議会設置初期の頃から文学館の活動については、「文学は本来読まれるべきものであって、展示に適するものではない。」<sup>21</sup> との指摘があるように、文学館の展示資料の多くは直筆原稿、書簡などの紙資料、文学者の著作物等であることから、「観る」のではなく、「読む」ことが鑑賞の手法である。究極的には、「読書」こそが展示資料を理解する第一段階であり、文学者の作品を知らずして、遺品やゆかりの品々等の「観る」展示物に対する興味関心もわかないであろう。しかし実際には文学館に足を運ぶ人が皆、訪問館の主題とする文学者の作品や文学者自身についての知識的バックグラウンドを持っているとは限らない。特に地域文学館は、当該地域における公の社会教育機関としての立場から、特定の知識・興味を有する層に限られた機関ではなく、広く市民に開かれた機関として運営していく必要がある。これらの課題を乗り越える手段として注視されているのが、企画展の関連事業や次項で分析をする教育普及事業なのであり、実施事業数増加の背景には、このような事情があると考えられる。

下位機能の具体的な内訳をみていくと、教育普及事業（表3）においてはレクリエーション機能以上に市民教育機能を有する事業を実施している文学館の方が多く、一方で展覧会関連事業（表2）に関してはレクリエーション機能を有する事業の方が多く、両者は対照的である。これは一見、展覧会事業と教育普及事業双方の存在によって、レクリエーション機能と他の市民教育機能のバランスをとっているかのように見える。しかし実際には表1、2、3のいずれにおいても示されている通り近年の博物館全体に見られる傾向と同様に文学館においても1990年代から徐々に、2000年代以降は急速に、文学教育や郷土教育だけでなく、レクリエーション的な要素の強い展覧会イベントを開催する事例も目立つようになっており、特に2000年代半ば以降は指定管理者制度の導入に伴い、来館者数と来館者の満足度の評価が重要視されるようになったことから、調査対象としたほぼすべての文学館において、展覧会関連事業に関しては、レクリエーション機能を有する事業が増加傾向にある。これは特に子どもを対象とする展覧会や関連事業において顕著に見られるが、一般市民を対象とした事業においても、1960～80年代にはレクリエーション機能を有する事業としては、文学散歩くらいであったのに対して、1990年代頃からは徐々にコンサートや落語、寄席、歌舞伎公演などの事業も実施されるようになっていく。

こうした事実は文学館に求められる役割そのものが近年、大きく変化していることの証

左といえよう。『博物館 危機の時代』においては、近年の博物館事業のあり方について以下のような批判があるが、文学館も同様の事態である。

表に出る展示や教育普及活動などの業務は比較的活発に行われている。ただし、筆者には集客を見込めるテーマが取り上げられる機会が飛躍的に増えたように思われる。中には博物館、美術館の本来の性格にそぐわないと思われるテーマも少なくない。教育普及に関わるイベントも娯楽性が重視される企画が多く、そこからなにを学ぶのかという視点が次第に薄れているように感じられる。

他の博物館と同様に文学館事業のあり方についても今後、議論の俎上に載せねばならないだろう。これもまた今後の課題である。

## 謝辞

末筆ながら日々の業務にご多忙な中で複数回にわたる論者の調査にご協力いただき、ときには非常に難しい依頼にも応えてくださった、文学館の職員の皆様、各県立図書館職員の皆様に心より感謝申し上げます。

## 【調査文献一覧】

### ●北海道文学館／北海道立文学館

#### (1) 『北海道文学館報』

第1号～第30号、北海道文学館事務局、1967～1988

第31号～第127号、財団法人北海道文学館、1988～2021

#### (2) 『年報』1995年度～2021年度、北海道立文学館・(財)北海道文学館、1996～2023

### ●石川近代文学館

#### (1) 『石川近代文学館々報』第1号、財団法人石川近代文学館、1968

#### (2) 『石川近代文学館ニュース』、財団法人石川近代文学館

第2号～第4号、1969～1970

号外、1974

復刊1号、1981

復刊2号、1983

第10号～第31号、1989～2008

第33号～第57号、2009～2022

- (3) 『石川近代文学館開館記念 郷土作家三人展』、石川近代文学館、1968
- (4) 『図録 石川近代文学館』、財団法人石川近代文学館、1998
- (5) 「石川近代文学館特別展年譜」HP

#### ●神奈川県立神奈川近代文学館

- (1) 『神奈川近代文学館10年史』、公益財団法人神奈川文学振興会、1994
- (2) 『神奈川近代文学館30年誌 1984-2013』、公益財団法人神奈川文学振興会、2015年
- (3) 『神奈川近代文学館年報』2017年度～2021年度、神奈川文学振興会、2018～2022
- (4) 『神奈川近代文学館』1号～156号、2022
  - 第1号～第111号、財団法人神奈川文学振興会、1984～2011
  - 第112号～第156号、公益財団法人神奈川文学振興会、2011～2021
- (5) 聞き取り調査への回答

#### ●熊本近代文学館／くまもと文学歴史館

- (1) 『熊本近代文学館報』第1号～第75号、熊本近代文学館、1985～2015
- (2) 『くまもと文学・歴史館報』第1号～第7号、くまもと文学歴史館、2016～2022
- (3) 『年報』2017年度～2021年度、熊本県立図書館、2018～2022

#### ●山梨県立文学館

- (1) 『山梨県立文学館館報』、第1号～、No.115、1989～2022、山梨県立文学館
- (2) 『山梨県立文学館年報』、山梨県立文学館
  - 平成6～8年度、1997
  - 平成9年度～令和3年度1998～2022
- (3) 『開館10周年記念誌』、山梨県立文学館、1999

#### ●青森県近代文学館

- (1) 『青森県近代文学館報』、青森県近代文学館
  - 開館準備号、1994
  - 開館記念第1号～第38号、1994～2021
- (2) 『青森県立図書館 要覧』平成6年度～令和3年度、青森県立図書館、1994～2021

●群馬県立土屋文明記念文学館

- (1) 群馬県情報公開請求制度により、群馬県立土屋文明記念文学館より直接提供いただいた内部記録を職員の方が直接取りまとめた資料
- (2) 『風 文学紀要』、群馬県立土屋文明記念文学館  
第1号(1997)、第4号(2000)、第10号(2006)、第14号(2010)
- (3) 『令和3年度年報』、群馬県立土屋文明記念文学館、2022
- (4) 聞き取り調査への回答

●高知県立文学館

- (1) 『高知県立文学館ニュース』第1号～第96号、高知県立文学館、1998～2022
- (2) 『高知県立文学館開館5周年 記念誌』、高知県立文学館、2003
- (3) 『高知県立文学館開館10周年 記念誌』、高知県立文学館、2008
- (4) 『高知県立文学館開館15周年 記念誌』、高知県立文学館、2013
- (5) 『高知県立文学館開館20周年 記念誌』、高知県立文学館、2018

●さいたま文学館

- (1) 『館報』平成9年度～令和3年度、さいたま文学館、1998～2022
- (2) 『さいたま文学館だより』1号～6号、さいたま文学館、2002～2007

●かごしま近代文学館

- (1) 『かごしま近代文学館 かごしまメルヘン館年報』1998年度～2021年度、かごしま近代文学館、かごしまメルヘン館、2001～2022
- (2) 『かごしま近代文学館 かごしまメルヘン館館報』第2号～第25号、公益財団法人かごしま教育文化振興財団 かごしま近代文学館 かごしまメルヘン館、1999～2022
- (3) 『公益財団法人 かごしま教育文化振興財団決算に関する書類』平成27年度～令和3年度、公益財団法人かごしま教育文化振興財団、2016～2023

●徳島県立文学書道館

- (1) 『徳島文学書道館 企画展 開館20年のあゆみ』、徳島県立文学書道館、2022
- (2) 『徳島県立文学書道館ニュース ことのは』第1号～第77号、徳島県立文学書道館、2002年10月1日～2022年4月25日

### ●あきた文学資料館

- (1) 『あきた文学資料館』第1号～第8号
- (2) 『あきた文学資料館だより』、あきた文学資料館  
第1号（通巻第9号）～第4号（通巻第12号）2010～2012  
通巻第13号～通巻第33号、2012～2022
- (3) 『秋田県立図書館要覧』平成20年度～令和3年度、秋田県立図書館、2008～2022
- (4) 聞き取り調査への回答

### ●高志の国文学館

- (1) 『高志の国文学館年報』、高志の国文学館、平成24年度～令和3年度、2013～2022
- (2) 聞き取り調査への回答

### ●福井県ふるさと文学館

- (1) 『福井県立図書館・ふるさと文学館年報』令和2年度～令和4年度、福井県立図書館・福井県ふるさと文学館、2020～2022
- (2) 『ふるさと文学館ふくい』No.1～No.50、福井県ふるさと文学館、2015～2022
- (3) 『福井県ふるさと文学館報 ふる文ニュースレター』第1号～第8号、福井県ふるさと文学館、2015～2022

## 註

- <sup>1</sup> 中沢弥「文学館雑感」、『昭和文学』第60集、昭和文学会、2010年3月、p108
- <sup>2</sup> 「文学館十年の歩み（略年譜）」、『日本近代文学館』第13号、1973年5月、日本近代文学館、p10
- <sup>3</sup> 上田常隆「文学史展にあたって」、『日本近代文学館創立記念 近代文学史展』、日本近代文学館、1963
- <sup>4</sup> 図書館法第3条、山下友信、宇賀克也、中里実編『六法全書 平成30年度版 I』、有斐閣、2018、p2636
- <sup>5</sup> 中村稔「〈連載〉随想——文学館学序説のエスキスのために（3）」、『日本近代文学館』第167号、日本近代文学館、1999年1月、p1
- <sup>6</sup> 駒見和夫「文学系博物館小考」、『和洋國文研究』40、和洋女子大学、2005年3月、p67
- <sup>7</sup> 渡邊真衣「文学博物館の目的と機能」、『國學院大學博物館學紀要』第32輯、國學院大學博物館学研究室、2008年3月、pp33-39

- <sup>8</sup> 小国七慧「全国文学館協議会設置後の文学館研究における文学館機能論の問題について」、『國學院大學大学院紀要』第51輯、國學院大學、2020
- <sup>9</sup> 生田美秋「文学館」、『博物館教育論』、ぎょうせい、2012、pp112-115
- <sup>10</sup> 中村稔「〈連載〉随想——文学館学序説のエスキスのために（4）」、『日本近代文学館』第168号、日本近代文学館、1999年3月、p1
- <sup>11</sup> 公益財団法人神奈川文学振興会、『神奈川近代文学館10年史』、公益財団法人神奈川文学振興会、1994年10月1日、p34
- <sup>12</sup> 「次回のイベント 少年少女文学展」、『熊本近代文学館報』第15号、1990年6月25日、p8
- <sup>13</sup> 『山梨県立文学館年報』平成19年度、山梨県立文学館、2009年2月4日、p28
- <sup>14</sup> 中村は、『宮沢賢治研究会』を宮沢賢治記念館刊としているが、正確には宮沢賢治研究会は宮沢賢治記念館とは別施設である、宮沢賢治イーハトーヴ館を活動拠点としている。
- <sup>15</sup> 中村稔『文学館を考える 文学館学序説のエスキス』青土社、2011、p23
- <sup>16</sup> 『高志の国文学館年報』平成25年度、2014年11月25日、p33
- <sup>17</sup> 『かごしま近代文学館 かごしまメルヘン館館報』第3号、かごしま近代文学館 かごしまメルヘン館、2000年2月28日、p4
- <sup>18</sup> 『高知県立文学館ニュース』第41号、高知県立文学館、2008年6月20日、p5
- <sup>19</sup> 『福井県ふるさと文学館報』第3号、2017年3月31日、p5
- <sup>20</sup> 紀田順一郎「新しい文学館像に向けて」、『昭和文学研究』第60集、昭和文学会、2010年3月、p83
- <sup>21</sup> 註13に同じ、p20
- <sup>22</sup> 辻秀人編『博物館 危機の時代』、有斐閣、2012